母語話者日本語教師不安尺度の開発
―新しい教材を教える場面に着目して―

Development of an Anxiety Scale for Native Japanese Language Teachers: Focused on Teaching a New Text

布施　悠子

要旨

本研究では母語話者日本語教師を対象に PAC 分析の手法を援用したインタビューを行い、そこで得られたキーワードと先行研究を参考にして新しい教材への教授不安の項目を策定し、それを用いた質問紙調査により、教授不安の構造を明らかにした。因子分析の結果、「授業実践力」「学生との相性」「教授方法の模索」「所属機関と自分の立場」の 4 因子が得られ、母語話者教師の教授不安を軽減するには自身の「授業実践力」を磨くことだけではではなく、学生や教材の使い方、所属機関との関係など対外的な問題も解決される必要があることが示唆された。

キーワード：不安、母語話者日本語教師、新しい教材、尺度、PAC 分析

１．研究の目的と背景

一括りに「日本語教師」といっても、彼らの教育機関や教授歴、所属機関などは一般的な義務教育の小・中学校教師に比べ一様ではない。にもかかわらず、教授法の研修や授業見学などはその教師が所属する機関の判断に委ねられている部分が多く、個人レベルでの教授法の研鑽、教材研究、教案準備などを行わなければならないのが実情で、一人で不安や悩みを抱えていることも少なくなく、授業や学生との関係、学校との関係について日本語教師として生きていく中で不安や悩みはつきものである。

このような状況で日本語教師が新しい教材を目の前にした時、新人教師であろうとベテラン教師であろうと多かれ少なかれその教授法や教材やカリキュラム作成に頭を悩ませることだろう。また、日本語教師には母語話者教師と非母語話者教師がいるが、新しい教材を教える際に感じる不安は非母語話者教師が感じる日本語の語学能力への不安や日本文化などの知識不足の不安とは異なり、全ての教師が共通に感じるものであろう。よって、本研究では新しい教材を教える際に着目し、その際母語話者日本語教師が感じる不安についてその全体的な構造を明らかにしていくことを目的とし、研究を進めることとする。

２．先行研究

日本語教師の不安についてこれまでの先行研究を見ていくと、非母語話者教師の教授不安について量的調査によって西谷（2013）で明らかにされており、不安尺度の開発とその結果による日本語教育への提唱がなされている。一方、国内外合わせて母数がより大きい

であろう母語話者日本語教師の不安や葛藤、悩みについての研究は末吉（2011、2013）や牛窪（2014）などにより質的研究が行われており、彼らの抱える不安の一部が明らかになっているが、不安構造の全体像が量的に明らかになっているとは言いがたい。

そこで本研究では、母語話者日本語教師の新しい教材を教える際に感じる不安を新たに測定する不安調査項目を作成することから始め、まず教授背景の異なる母語話者日本語教師 5 名に対してインタビュー調査を行った（調査 1）。次に、作成した調査項目を基に 150 名の母語話者教師に対して質問紙調査を行い、不安の全体的構造を明らかにした（調査 2）。

３．調査の方法

調査の概要は以下の通りである。

調査 1：不安調査項目作成のためのインタビュー

- 調査期間：2013 年 11 月、12 月
- 調査協力者：母語話者日本語教師 5 名（以下、教師 A、B、C、D、E）

調査 2：不安構造を明らかにするための質問紙調査

- 調査期間：2014 年 7 月下旬～9 月上旬
- 調査協力者：母語話者日本語教師 150 名（属性は資料 1 参照）

４．インタビュー調査の結果

4.1. 調査の手順

非母語話者日本語教師の不安尺度を開発した西谷（2013）に倣い、質問項目作成の調査として PAC 分析の手法を援用した。PAC 分析は質的分析とクラスター分析を組み合わせた研究法である（内藤 2002）。また、三島（2011）は PAC 分析の効用として「これまであまり研究されることのなかった新しい研究対象に関する質問紙を開発・使用する場合、PAC 分析は極めて有効な方法である。PAC 分析を利用すれば、質問項目を抽出できるばかりか、質問項目の相互関係や、その背景にある概念についても捉えることができる。」と述べている。

PAC 分析の核心は調査協力者がデンドログラムにおける語のまとまり（クラスター）を見ながら、イメージや解釈を報告し、調査協力者はその報告、語の重要順などに鑑みて、総合的な解釈を試みる部分とされる（内藤 2002）。しかし、今回の調査では不安に関する質問項目を抽出することが主な目的であったので、調査協力者の報告や各クラスターの項目は活用し、総合的な解釈を試みることは行わず、PAC 分析の手法を援用するのみに至った。

インタビューの手順としては、まず、5 名の調査協力者に以下の指示文を与えた。

指示文：新しい教材を始める時/新しい分野を教える時どんな気持ちになりますか？ 不安や心配、自信など、どんな気持ちや考えを持ったかについて頭に浮かんだ言葉を短い文で思い浮かんだ順にカードに書いてください。

なお、ここでいう「新しい教材」とは、調査協力者が今まで見たことのない教材を指し、「新しい教材を始める」とは、事前に特に使い方の説明がなく所属機関から手渡された教材を始めることである。この部分については、調査協力者へ口頭で補足説明してある。

次に、自分にとって重要と思う順に並べ替え、項目間の類似度を 7 段階（強くそう思う：7、全くそう思わない：1）で答えさせた。その後、統計ソフト（SPSS Ver.19）を用いて、クラスター分析を行い、産出されたデンドログラムを調査協力者に見せながら感じたことを話してもらうという手順をとった。

上記の手順で調査協力者に PAC 分析を行った結果、新しい教材を使用する際の不安について質問項目を作成する際のいくつかの有効なキーワードが得られた。本研究ではキーワードが多く得られた教師 A、B、D、E を取り上げる。なお、教師 C の回答から得られたキーワードは教師 A、B の回答から得られた内容に含まれていたため今回は取り上げなかった。また、想起文から連想されたキーワードのうち、不安として捉えられない感情を伴う要素は不安項目の作成からは除外した。

4.2　教師 A のインタビュー結果

教師 A は 20 代の女性教師で、教育歴は 2 年未満、都内日本語学校の非常勤講師である。彼女は授業に臨む際、他の教師より不安を抱えやすいタイプであると自らを語っている。

【第一クラスター（重要度順 1～3）:「授業前の漠然とした不安」での語り】

「*1 グループは基本的にはとりあえず準備段階の話。授業に入った時ではなく、授業に入る前の話で、特に教案を作る段階のあたりの気持ちなんですけど、最初に教案を書く前あたりにこれからどうしようって最初考える時の本当に一番最初の悩み。*」

【第二クラスター（重要度順 4、5）「授業準備時の具体的な不安」での語り】

「*実際作る段階での、授業の構成を考える段階の不安。構成とか教案を考える段階の不安で、実際作り始める時の、新しい教材を見てみた段階で実際イメージがうまく湧かなかったりとか、そういう時の不安。イメージがうまくわかないとか。ここがある意味一番苦しい段階というか、不安というか、現実に迫った不安*」

表 1　教師 A の記述

重要度順		想起順
1	教材を作るのに時間がかかりそうで落ち込む	7
2	準備が間に合うのか不安になる	8
3	慣れた物を使いたいなと思いやる気をなくす	5
4	教案をうまく作れるか不安になる	6
5	教科書を作った側の意図を考え悩んでしまう	9
6	どうやっていいかわからず怖くなる	1
7	逃げ出したくなる	3
8	学生の反応が想像できず怖くなる	4
9	とにかく緊張する	2
10	新しいタスクや内容に少しだけわくわくする	10
11	最初だからしょうがないと自分に言い聞かせて元気を出す	11

【第三クラスター（重要度順 6～9）「授業開始前の率直な気持ち」での語り】

「*3 グループはもう大体準備はできていて、ただ、準備はできているけど実際それができるかどうかわからないっていう段階の不安で、あまり経験がないので学生の反応が分からなかったりとか、実際これを本当にやって自分でやってみて、教室の中で困ったらどうしようとか、そういうことを想像する時とかの気持ち。*」

教師 A は第一のクラスターで準備段階以前の不安を挙げ、教材準備の所要時間や教材準備が間に合うのかといった新しい教材に対する大きい不安が述べられている。反対に第二のクラスターでは、具体的な準備段階の不安が挙げられている。教案作成や教科書の読み込みなどより自分の教師としての経験不足や能力のなさに対して不安を抱いている。そして、第三のクラスターからは、人間の本能的な不安が表れている。デンドログラム内にあるように、怖い、逃げたい、緊張といった人前に立つ場合に一般的に我々が感じる率直な感情や、学生との対話の中で自分がうまく対応できるかについて不安な気持ちが述べられている。

以上より、教師 A は①教材の準備時間の不安、②教案作成の不安、③自分の教師としての教授力の不安、④人前に立つことへの一般的な不安、⑤授業中の学生とのやり取りを想像した不安について語っていると考えられる。この点は、大野木・宮川（1996）にも言及されていたが、教育実習生や新人教師の共通部分の悩みや不安と考えられよう。以上のキーワードは全て不安の感情として、質問項目に取り入れることにする。

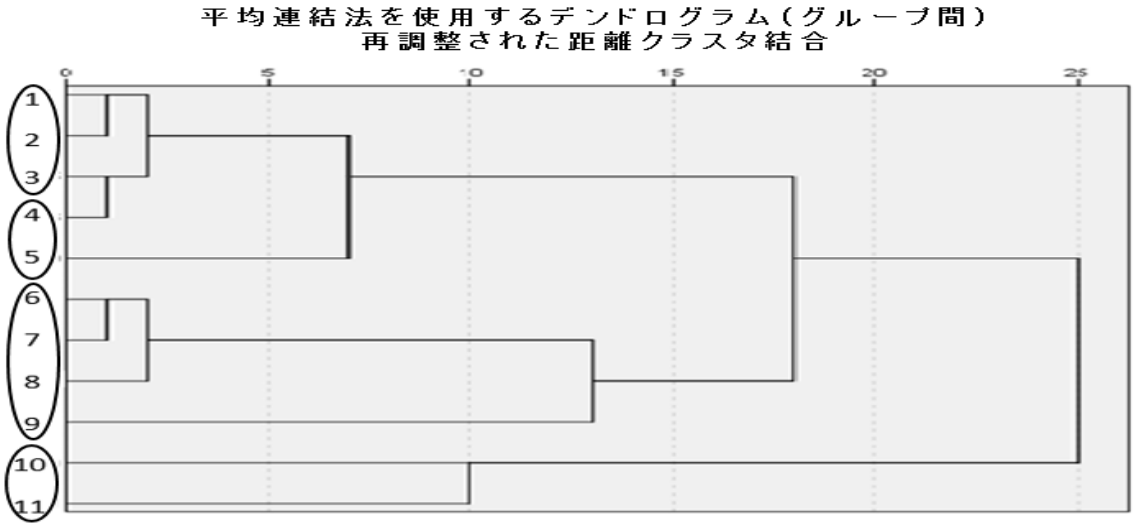

図１　教師Ａのデンドログラム（左列の数字は重要度順に対応。以下同様）

4.3　教師Ｂのインタビュー結果

教師Ｂは 30 代の女性教師で教授歴は 3 年未満、都内日本語学校の非常勤講師である。彼女も新しい教材を教える時のイメージは不安な部分が多いと語った。

【第一クラスター（重要度順 1～6）「教材に対する自分の能力の葛藤」での語り】

「*なんか、たぶんこれは自分の問題ですよね。自分は能力がないから大変そうだなっていう。比較じゃないですけど、他の先生がこうやって教えてるっていうのは自分がうまくいかないときとか、自分がうまくやってるつもりでももっといい方法があるんじゃないかとか*」

【第二クラスター（重要度順 7～9）「教材自体への不安な思い」での語り】

「*これはたぶん教材自体の問題っていうとおかしいけど。教材自体の問題とか。それはどうやっても広がらないでしょみたいな。（中略）まだやってないけど、その時すごいつまらなかったらどうしよう、やだな、続けるのが苦痛だなみたいな*」

表２　教師Ｂの記述

重要度順		想起順
1	できるかな？	1
2	大変そう	2
3	ちょっと楽しみ	5
4	いい勉強になりそう	6
5	自分の引き出しで大丈夫？	7
6	他の先生はどうやって教えてる？	8
7	常に新しい教材な気が…	9
8	この教材楽しい？つまらない？	3
9	つまらない教材だったら嫌だな	4

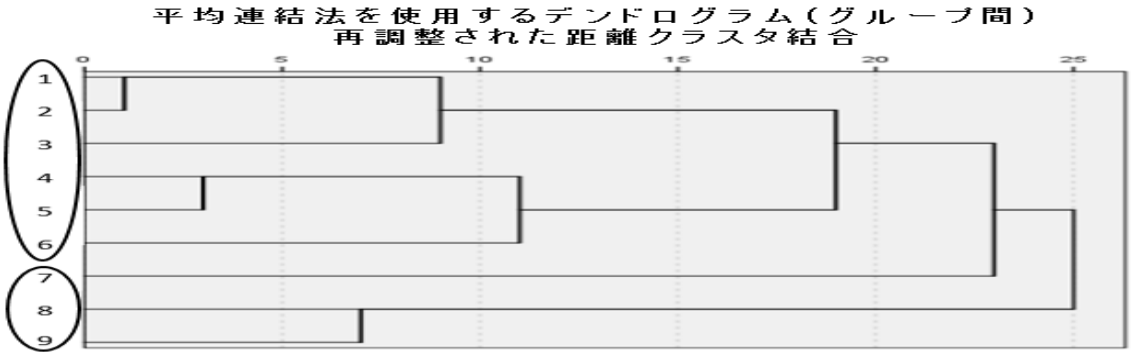

図 2　教師 B のデンドログラム

教師 B は第一のクラスターに対する語りの中で、教師 A 同様、自分のやり方が正しいのか、他の教師のやり方の方がもっと良いのではないかという教授法への葛藤を感じている。一方、第二のクラスターにおいて、いつも新しい教材を与えられているという不安感について述べられており、教師 B 自身が感じる教材自体への不安、具体的には教材の内容が話題を広げられるものか、教材の内容がおもしろいのかという点が挙げられている。

以上より、教師 B から得られた有効なキーワードとして、教師 A と重なる部分を除き、⑥自分の教授法への不安、⑦他の教師のやり方が分からない不安、⑧教材が目的も分からず常に渡されているという不安、⑨教材自体がおもしろいのかという不安、⑩教材自体が興味を持てる内容かという不安が考えられる。これらも教授法や教材自体に着目した新たなキーワードとして、質問項目に取り入れていく。

4.4　教師 D のインタビュー結果

教師 D は 40 代の女性教師、教授歴は約 5 年、都内日本語学校勤務の非常勤講師である。彼女は個人的な部分と常勤としての立場からとの両面から教授不安について語っている。

【第二クラスター（重要度順 3～7）「頭の中の悩み」での語り】

「*悩ましいところ？っていうことですよね。（中略）テーマがぶれちゃって来てないか、そこに盛り込むストーリーっていうかエピソードがそれでいいのか。エピソードだとか、流れだとか、やり方だとか*」

表 3　教師 D の記述

重要度順		想起順
1	学校での様子	6
2	導入部分に何を持ってくるか	7
3	ああ、疲れる	4
4	盛り込み過ぎ？	9
5	どう組み合わせよう	3
6	どうまとめようか	8
7	時間はどうする	10
8	さあ、何をしよう	2
9	でも、何か見えてきた	5
10	面白い	1

【クラスター間の相関関係内での語り】

「*自分で思う部分だとすると、本当はもっと学校とか現場のことを優先的に考えるべきことなのかしら。シリーズ的な、つまり 1 回 1 回のじゃなくて、続けてその中で継続してまとまりとして何かを与えるとか、もうちょっと俯瞰していうのを考える要素がこうしてみると出ていないので、それはきっと弱いんだろうと思いますね。*」

教師 D は第二のクラスターで、教材準備の不安の中で内容が偏っていないか、テーマから逸れていないかという教師 A と比べるとより具体的な教案作成の不安が語られていた。

一方、個々のクラスターには現れなかったが、クラスター間の相関関係について語っている際、学校全体や現場の設計、カリキュラムといった大枠で教材を捉えるという点が出てきた。これは他の教師からは挙げられなかったキーワードであり、教師 D が教材を俯瞰して考えることが足りなかったと内省しており、これも不安項目として挙げられよう。

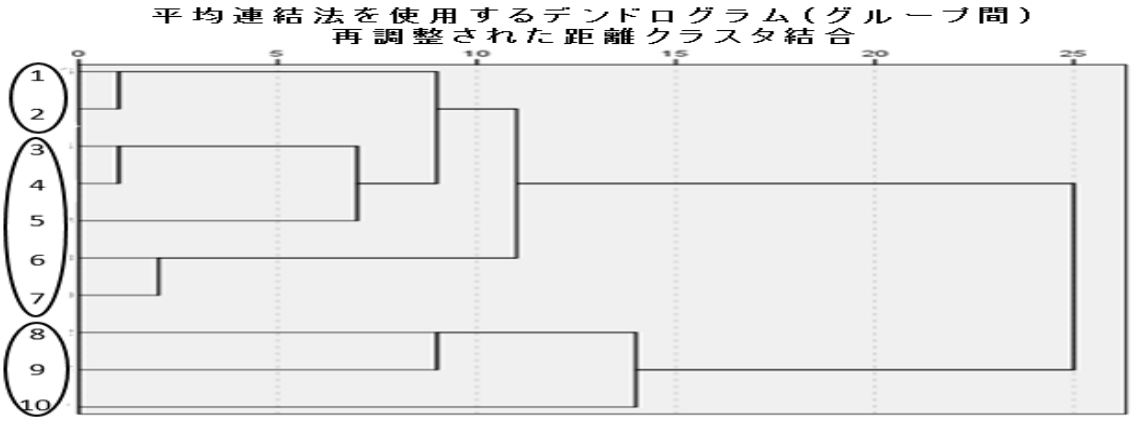

図 3　教師 D のデンドログラム

以上より、教師 D からは⑪教案の流れからずれることへの不安、⑫学校やカリキュラムと自分との整合性の不安というキーワードが得られた。⑫は新たな質問項目のテーマとしてより有効なキーワードであると考えられるため、質問項目に組み込んでいくことにする。

4.5　教師 E のインタビュー結果

教師 E は 50 代の女性教師で教育歴 20 年以上の日本語学校の校長である。彼女は自身の不安に加えて、学生と教材との関係に不安を抱いていることをインタビュー内で語った。

【第一のクラスター（重要度順 1、2）「学生の目から見た教材への思い」での語り】

「*授業の時に、学生が喜んで取り組むだろうかとか、授業がその学生がその教材に意義を感じてやってくれるかなっていうことですかね。*」

【第二のクラスター（重要度順 3～6）「自分自身の教材への期待」での語り】

「*これも、たぶん見慣れない構成とか活動とかがたぶんでているけど、きっと今までの教材に足りなかった何かがそこにはあるんだろうから、そこを使わなきゃいけない、生かさなきゃいけないっていう感じですかね。*」

【第三のクラスター（重要度順 7、8）「学生のことを考えた時の不安」での語り】

「*使う前の不安というか、今までの本では学生の満足させられなかったからこの本が入ったとか、学生のニーズが今の、新しい時代に合った、時代によって変わってくるからこの本になるんだっていうことから考えて、まあ、でもこれでいいのか、でもこれで学生が満足するのかっていう不安ですかね*」

表 4　教師 E の記述

重要度順		想起順
1	役に立つか	2
2	学生がおもしろがるだろうか	7
3	料理の仕方を考えたい	8
4	工夫された教材にちがいない	3
5	新しいことが身に付けられるか	4
6	おもしろそう	6
7	学生のニーズが変わったからだ	1
8	今のクラスに合うか	5
9	しょうがない	9
10	予習が大変だ	10

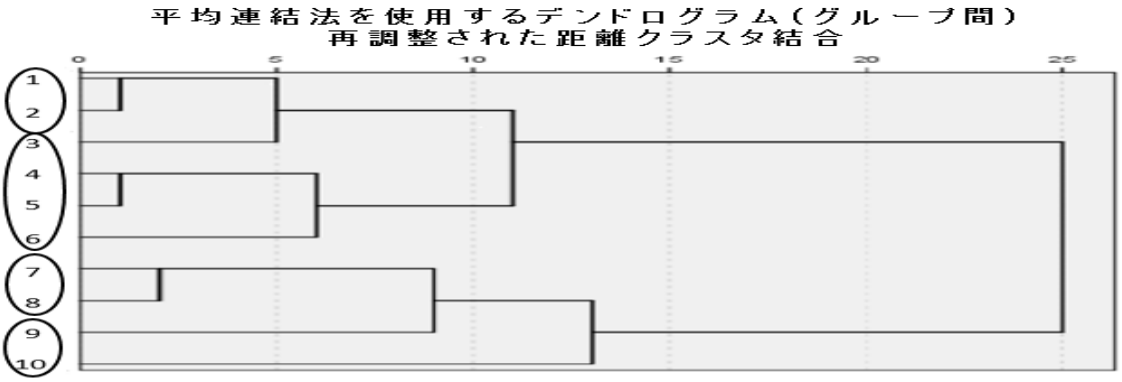

図 4　教師 E のデンドログラム

【第四のクラスター（重要度順 9、10）「教材への受け入れている気持ち」での語り】

「*昔の本をそのままやってた方が楽は楽ですよね。でもそれはやっぱり、ダメだと思うので、しょうがない*です。」

教師 E は第一のクラスターで、学生が新しい教材に対してどう取り組むか、どう感じているかといった学生が教材に対してどのような考えを抱くのかについて不安を挙げ、第三のクラスターでは、学生のレベルに合っているか、学生がこの教材を使うことで満足するかといった学生の目からの不安が同様に述べられている。これらは他の教師に見られなかった新しい視点である。一方、第四のクラスターで教師 E 自身が感じる教材準備への不安が語られている。また不安要素としては現れなかったが、第二のクラスターで今までの教材にない新しい教材の良い部分について述べており、教師 E はそれをうまく学生に教えられるかについて悩ましい部分であると捉えていたため、この要素も不安項目として追加した。

以上から、教師 E は⑬学生の新しい教材への取り組み方の不安、⑭学生のレベルとの整合性の不安、⑮新しい教材の良い部分を生かせるかという不安について述べていると考えられ、この点も質問項目に盛り込んでいくことにする。

５．不安質問項目の作成

上述のインタビューから得られたキーワード①～⑮（本文下線部）と、大野木・宮川（1996）と西谷（2013）の先行研究を参考に、質問項目を全部で 24 項目作成した（表 5）。また、質問項目と先行研究およびキーワードとの対比については、資料 2 に示した。

表 5　母語話者日本語教師不安尺度

1.　授業中に予想外の質問が出たらパニックになるのではないか不安だ
2.　自分でわかっていることを授業でわかりやすく説明できるか不安だ
3.　学生の間違いをきちんと直せるか不安だ
4.　学生からの質問にきちんと答えられるか不安だ
5.　授業でとりあげる例が学生に分かりやすいか不安だ
6.　自分の教え方が学生に合っているか不安だ
7.　他の先生がどうやって教えるか分からず不安だ
8.　新しい教材のいい部分を生かして教えられるか不安だ
9.　新しい教材を使って自分らしい授業ができるか不安だ
10. 新しい教材の準備が自分の負担になるのではないか不安だ
11. 新しい教材の準備時間が十分か不安だ
12. 新しい教材の教案が適切に作れるか不安だ
13. 教案がきちんと書けていても、授業がその通りにいかないのではと不安だ
14. 新しい教材を使っておもしろい授業ができるか不安だ
15. 新しい教材が導入された目的が分からず不安だ
16. 新しい教材が学生にとって役に立つ教材かどうか不安だ
17. 新しい教材が学生にとっておもしろいかどうか不安だ
18. 新しい教材が学生のレベルに合っているか不安だ
19. 学生が授業中よく反応してくれるか不安だ
20. 学生が新しい教材をやる意義を理解して授業に臨んでくれるか不安だ
21. 学生の興味を引き出すことができるか不安だ
22. 学校が決めた教材だから途中で投げ出すことができず不安だ
23. 学校が決めたカリキュラムから外れたところを教えないか不安だ
24. 学校側の新しい教材を使うことへの期待にこたえられるかどうか不安だ

質問紙の調査スケールは四段階で行い、4 が「強くそう思う」、3 が「そう思う」、2 が「あまりそう思わない」、1 が「全然そう思わない」とした。不安度が一番高い値が 4、一番低い値が 1 となる。また、質問紙に回答する際、それぞれの教師が想定する場面が異ならないよう以下の状況設定も付け加え、調査協力者にはその状況に従って質問紙に答えてもらった。

【状況設定】
現在所属している学校・教育機関から、新学期に使うためということで新しい教材が配布されました。その教材はあなたが教えたことがないテーマや内容ばかりです。その教材を教える際に感じる不安について、以下の質問事項にお答えください。なお、教材は教科書、副教材、プリントなどの紙媒体とします。

６．質問紙調査の結果

質問紙 24 項目の回答に対し、SPSS19.0 を用いて主因子法とプロマックス回転による因子分析を行った。その結果本調査では四因子が得られた。以下表 6 が因子行列構造である。

第一因子は 8 項目で構成されており、実際の授業内で自分が実践を行っていく上での不安項目に対する因子負荷量が高く、「授業実践力」と命名した。これは、教育実習生に対する不安を調査した大野木ほか（1996）や、外国人日本語教師の不安を調査した西谷（2012）にも表れている項目である。

第二因子は 5 項目で構成されており、新しい教材が学生に合っているか、また学生が新しい教材をどのように受け止めてくれるかについての不安項目に対する因子負荷量が高かった。そのため、この因子は新しい教材と学生との関係から生み出される不安のまとまりと捉え、「学生との相性」と命名した。

第三因子は 8 項目で構成されており、新しい教材の教案やその準備、他の先生の教え方、また、自分らしさや面白い授業の展開など、新しい教材の様々な使い方について教師が考えている不安項目に対する因子負荷量が高いと考えられる。そのため、この因子を「教授方法の模索」と命名した。

第四因子は 3 項目で構成されており、新しい教材を策定した学校側との関係性について感じる不安項目でまとまっており、「所属機関と自分の立場」と命名した。

以上から新しい教材を教える際に感じる不安として、「授業実践力」「学生との相性」「教授方法の模索」「所属機関と自分の立場」の 4 因子構造であることが示された。内的整合性を検討するためクロンバックのα係数を算出したところ、「授業実践力」で 0.888、「学生との相性」で 0.840、「教授方法の模索」で 0.864、「所属機関と自分の立場」で 0.729 と高い値の信頼度が得られた。また、それぞれの因子相関は互いに有意な正の相関を示し（表 7）、第一因子と第三因子、第一因子と第二因子、そして、第二因子と第三因子に高い相関が見られた。

表 6　不安項目の因子分析結果

	質問項目（省略記）	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
授業実践力	4.　質問への回答	0.847	0.355	0.482	0.470
	5.　分かりやすい例	0.753	0.464	0.449	0.241
	6.　自分の教え方	0.742	0.543	0.482	0.112
	2.　分かりやすい説明	0.732	0.299	0.375	0.286
	3.　間違い訂正	0.698	0.322	0.348	0.438
	1.　パニック	0.697	0.327	0.434	0.470
	21. 学生の興味を引き出す	0.689	0.572	0.643	0.165
	13. 教案通りにいかない	0.529	0.349	0.492	0.478
学生との相性	16. 学生に役立つ	0.341	0.829	0.356	0.276
	18. 学生のレベルに合う	0.401	0.780	0.382	0.253
	17. 学生にとっておもしろい	0.467	0.764	0.352	0.154
	20. 学生の理解	0.410	0.610	0.468	0.319
	15. 教材の導入目的	0.334	0.604	0.400	0.454
教授方法の模索	11. 教材の準備時間	0.356	0.304	0.756	0.343
	10. 自分への負担	0.295	0.280	0.750	0.403
	12. 教案作成	0.599	0.327	0.692	0.472
	9.　自分らしい授業	0.589	0.496	0.675	0.386
	19. 学生の反応	0.629	0.558	0.668	0.326
	14. おもしろい授業	0.598	0.421	0.646	0.196
	7.　他の教師の教え方	0.539	0.441	0.541	0.475
	8.　いい部分を生かす	0.521	0.405	0.525	0.308
所属機関と自分の立場	23. カリキュラムからの逸脱	0.432	0.316	0.449	0.729
	24. 学校の期待	0.512	0.347	0.460	0.631
	22. 途中で投げ出せない	0.296	0.433	0.393	0.571
	寄与率%	37.782	6.883	5.656	3.799
	累積寄与率%	37.782	44.665	50.322	54.121

表 7　因子間相関

因子	第 1	第 2	第 3	第 4
第 1	1.000	0.544	0.632	0.394
第 2		1.000	0.544	0.286
第 3			1.000	0.438
第 4				1.000

7．まとめ

本研究では母語話者日本語教師が有する不安について、新しい教材を教える場面に着目し、先行研究とインタビュー調査をもとに不安尺度を作成した。次に、それを用いて質問

紙調査を行い、母語話者日本語教師の不安の構造を明らかにした。その結果、「授業実践力」、「学生との相性」、「教授方法の模索」「所属機関と自分の立場」の 4 つの要素が得られた。それぞれの因子の相関は高い。

ここから、母語話者教師の教授不安を軽減するには自身の「授業実践力」を磨くことだけではなく、学生や教材の使い方、所属機関との関係など対外的な問題も解決される必要があることが分かった。

８．今後の課題

母語話者教師が持つ不安の全体的な構造は明らかにはなったが、教師それぞれの属性により持つ不安が異なるのか、異なるとしたらどのような点が異なるのかについては今後の研究で明らかにする必要がある。また、不安を多く持つ母語話者教師のグループが不安を軽減するには具体的にどのような対策が必要なのかについても今後の課題として提言を検討する必要があるだろう。

参考文献

牛窪隆太（2014）「新人教師の葛藤を生み出すもの　制約下での発達に焦点をあてて」『多摩留学生教育研究論集』9、pp.1-10

大野木裕明、宮川充司（1996）「教育実習不安の構造と変化」『教育心理学研究』44 (4)、pp.454-462

末吉朋美（2011）「教師による「語りの場」の意義：ある教師とのナラティヴ探究を通して」『阪大日本語研究』23、pp.79-109

末吉朋美（2013）「教師の悩みはどこから来るのか？：日本語教師たちとのナラティヴ探究を通して」『阪大日本語研究』25、pp.75-104

内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門［改訂版］「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

西谷まり（2012）「外国人日本語教師の不安」『日本教育工学会研究報告集』12 (5)、pp.179-184

西谷まり（2013）「外国人日本語教師不安尺度の開発」『一橋大学国際教育センター紀要』4、pp.3-13

Horwitz, E. K. (1986) Preliminary evidence for the reliability and validity of a foreign language anxiety scale, *TESOL Quarterly, 20*, pp.559-562

三島浩路（2011）「PAC 分析を利用した質問紙の開発と利用―「学校機器の問題を通して」―」『PAC 分析研究・実践集 2』、pp.79-99

元田静（2000）「日本語不安尺度の作成とその検討―目標言語使用環境における第二言語不安の測定―」『教育心理学研究』48、pp.422-432

（ふせ　ゆうこ　言語社会研究科修士課程修了生）

資料 1　質問紙調査協力者の属性（実施時）

性別	男性	25	所属先	大学	37
	女性	125		日本語学校	78
年代	20 代	27		その他	29
	30 代	47		大学＆日本語学校	1
	40 代	35		日本語学校＆その他	4
	50 代	26		大学＆日本語学校＆その他	1
	60 代以上	14	所属場所	国内	85
	無回答	1		海外	65
教育歴	2 年未満	29	役職	非常勤	73
	5 年未満	37		常勤	74
	10 年未満	40		その他	3
	10 年以上	54	所属先から教材について説明があるか	ある	75
				ない	74
				無回答	1

資料 2　質問項目と先行研究及びキーワードとの対応

質問項目	先行研究及びキーワード
1～6	先行研究引用
7	教師 B：⑦他の教師のやり方が分からない不安
8	教師 E：⑮新しい教材の良い部分を生かせるかという不安
9、14	教師 A：③自分の教師としての教授力の不安
10、11	教師 A：①教材の準備時間の不安
12	教師 A：②教案作成の不安
13	教師 D：⑪教案の流れからずれることへの不安
15	教師 B：⑧教材が目的も分からず常に渡されているという不安
16	教師 B：⑩教材自体が興味を持てる内容かという不安
17	教師 B：⑨教材自体がおもしろいのかという不安
18	教師 E：⑭学生のレベルとの整合性の不安
19	教師 A：⑤授業中の学生とのやり取りを想像した不安
20	教師 E：⑬学生の新しい教材への取り組み方の不安
21	教師 A：③自分の教師としての教授力の不安
22～24	教師 D：⑫学校やカリキュラムと自分との整合性の不安